

しては四一年十二月に繰り上げて第四三回卒業式がおこなわれた。インド科としては第一六回本科卒業生を出したことになる。翌四二年四月にインド科は速成科に一五名の入学者があった。第四四回卒業式は四三年九月二十五日におこなわれ、インド科は一四名の卒業生を出した。四四年九月には一名の卒業生があった。四五年三月の卒業生一〇名は四年制の最後の卒業生であり、四六年三月の卒業生六名は外国語学校を三年で終了し外事専門学校を卒業するという変則的事態となったのである。

外事専門学校入学の第一期生に対する蒲生とバルラースの授業は従来と異なることなく、文法、日常会話、短編小説の訳読など厳しいものであったが、情勢の急迫にともない学生の徴用や応召、一九四五（昭和二十）年四月の戦災による校舎の焼失などで授業は正常な体をなさなくなった。外事専門学校時代のインド科は南方進出への熱気と敗戦による虚脱と挫折感が錯綜した混乱期の渦中にあった。こうした状況を経て、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日の「国立学校設置法」施行によって東京外国語大学が設置され、六月一日に学則が制定されるにおよび、ここにインド科は画期的な新時代を迎えることになったのである。

二 新制大学におけるインド学科の発展と拡大

1 インド学科の時代

移行から拡大へ（一九四九—一九六〇）

一九五一（昭和二十六）年三月三十一日に東京外事専門学校は廃止された。インド科最後の卒業生一名は二か年

以上の在学を条件として新制大学への編入学を許可された。大学への編入学者は七名であった。四九年に設置されたインド学科は五三年三月に外事専門学校よりの編入学者を新制大学の卒業生として送り出した。名実共に新制大学の第一期生となるのは四九年入学の一五名である。これに先立ち五一年四月にインド学科は第七部第一類という名称を与えられた。この名称は一九六一（昭和三十六）年三月三十一日まで存続した。

一九四五（昭和二十）年九月三十日に、蒲生に次ぐ日本人教員として一九三八（昭和十三）年三月ヒンドスタニー語部貿易科卒業の土井久彌が講師として採用された。一九五一（昭和二十六）年四月一日には四七年三月卒業の黒柳恒男が助手に任命された。この年、インド学科に創設以来初めての女子学生一名が入学した。バルラースの帰国後空席のままであったインド人教師には在日インド大使館情報官補の職を辞して貿易会社に勤務していたサット・プラカーシシュ・ガンディーが五四年九月一日に講師として採用された。ガンディーは定年退職する一九八五（昭和六十）年三月三十一日まで在職し、七一年四月一日には客員教授の名称を与えられた。一九八八（昭和六十三）年四月十一日にニュー・デリーで急逝した。政府はガンディーの多年にわたるウルドゥー語教育への貢献に対して勲四等瑞宝章を遺贈した。

新制大学が発足してもインド学科の授業形態や講義内容が大きく変わることはなかった。蒲生は文法の授業と後期学生に対するイスラーム学の講義が柱であった。一九五一（昭和二十六）年度の蒲生の講義題目は普通講義「ウルドゥー文法概論」、特殊講義「回教概論」、演習「Bazar-e husn」第一巻、演習「H. A. R. Gibb : Mohammedanism」である。土井は前期学生にリンガフォンを使用し徹底したヒヤリングの授業をおこなった。五一年度の土井の講義題目は普通講義「ウルドゥー語学概論」、特殊講義「プリーム・チャンド短編集より見たる印度社会の研究」で、特殊講義ではプリーム・チャンドの短編小説一五編が取り上げられている。



プラカーシュ・ガーンディー



土井久彌

ヒンディー語教育を重視していた土井は上石神井時代にインド人のカムラー・ラトナムを招き、週一回ヒンディー語の授業を始めた。用いられた教科書はウツタル・プラデーシュ州の小学生用のものであった。授業は長続きしなかったが、インド語の名の下に一貫してウルドゥー語教育がおこなわれてきたインド学科にとって、初めてヒンディー語が授業に取り入れられたのは画期的なことであった。土井は「カムラー・ラトナム夫人」(『インド文学』第一一号、一九七七年三月)でラトナムを、日本の少なくとも東京のヒンディー研究者たちにとっては初めて本格的なヒンディーを教えてくれた大恩人なのである、と評している。助手として前期二年を担当した黒柳は文法の授業に合わせて毎回の聞き取り試験に特に力を入れたほか『預言者伝』のような長編読物も訳読の授業に加えた。ちなみに、新制大学発足当初のインド学科でウルドゥー語・英語辞書を所持していた学生は非常に少なかった。一九五〇(昭和二十五)年入学者ではクラス一五名中僅か三名の手に翻刻版の辞書があるのみであった。

二 新制大学におけるインド学科の発展と拡大

一九五三（昭和二十八）年六月に土井は政府給費留学生として二年間インドのアラハーバード大学に留学した。土井の不在中の空白は一九四三（昭和十八）年卒業の宮島政巳と一九四八（昭和二十三）年より非常勤講師を務めていた一九四五（昭和二十）年卒業の河嶋慎一が埋めた。

一九五二（昭和二十七）年四月に田中於菟彌が非常勤講師になった。田中は前期事情講義と普通講義を担当した。五三年度の田中の普通講義の題目は「インド文化史」、五四年度は「ヒンドゥー教の改革とインド独立運動」である。サンسكريット語の専門家である田中のサンسكريット語の講義もまた重要であった。一九七〇（昭和四十五）年度まで非常勤講師を務めた田中の存在は非常に大きかったのである。田中と時を同じくしてインド人のクリパール・スィングが非常勤講師として採用された。クリパールの授業は簡単なヒンディー語の文章を読ませ、これを英語で説明するという形式でおこなわれた。そのためこの段階でデーヴァナーガリー文字の習得は必須となった。クリパール・スィングは丸二年間在職した。

一九五五（昭和三十）年八月帰国した土井は、授業に積極的にヒンディー語を取り入れるようになった。現代ヒンディー文学の専門家である土井は、特にプレーム・チャンドの研究者であったため、教材としてプレーム・チャンドの長編小説や短編小説が以前に増して導入されるようになった。原書の写真版が教科書として用いられた。学生一人一人に原書が渡されるようになるのは一九六〇年代半ばになってからのことである。

一九五八（昭和三十三年）四月、五六年三月第七部第一類卒業の鈴木斌が副手として採用された。同年十二月に黒柳がイラン政府奨学生としてテヘラン大学文学部に留学した。黒柳の専門領域はペルシャ古典文学である。黒柳の留学中、五九年四月に鈴木が非常勤講師に任ぜられ、文法を担当した。同年、東京大学の荒松雄が非常勤講師として普通講義「インド史の諸問題」を講義した。荒は六三年四月より五年間再び非常勤講師に招かれて共通講義「近代イン

ド史の研究」などを受け持っている。

一九五九（昭和三十四）年はインド学科の歴史にとって忘れられない重要な年となった。すなわち、この年の四月よりインド学科はウルドゥー語専攻とヒンディー語専攻の学生が分離されたのである。分離は新入生に対してだけでなく在學生についてもおこなわれた。この結果、蒲生、黒柳、ガーンディー三名の専任教官を擁するウルドゥー語に対して、ヒンディー語の専任は土井一名のみとなった。そのためヒンディー語はインド人非常勤講師をはじめ複数の非常勤講師の採用が必要になった。前期専攻単位の不足を補うため、ヒンディー語専攻の新入生もウルドゥー語文法の授業を受けた。六〇年四月に黒柳が帰国した。鈴木は同年十二月にパーキスタン政府奨学生として二年間カラチ大学文学部に留学が決まり、十一月に退職した。六一年四月一日、インド学科はインド・パーキスタン学科と改称された。

2 インド・パーキスタン学科（ウルドゥー）の時代

第一期（一九六一—一九七九）

一九六一（昭和三十六）年四月一日に誕生したインド・パーキスタン学科は名称では一つにまとめられていたが、実質的にはそれぞれ独立したウルドゥー語学科とヒンディー語学科であった。この年三月の卒業生は三年進級時に自分からウルドゥーかヒンディーを選択した学生で、ウルドゥー語専攻とヒンディー専攻の第一回生となった。事実上のウルドゥー語学科とヒンディー語学科の発足は新入生を迎えた一九六一年四月一日なのである。一九六四（昭和三十九）年四月一日より学科の名称がインド・パーキスタン語学科と改称された。この名称は同語学科が一九九五

(平成七)年四月一日に南・西アジア課程に改組されるまで変わらなかつた。ここでは記述上の混乱を避けるため、インド・パキスタン語学科をウルドゥー語学科とヒンディー語学科に分けて述べることにする。

一九六二(昭和三十七)年四月一日にヒンディー語学科は六一年三月ヒンディー語学科卒業の田中敏雄を助手に採用した。六三年の一月に帰国した鈴木は同年四月一日に専任講師に任命された。ウルドゥー現代文学を専攻する鈴木によつて講義に「ウルドゥー文学史」「現代小説訳読」「現代短編小説訳読」などが加えられるようになった。時事作文の授業も新たに始められた。いっぽうで黒柳の講義は「イスラーム文化史」「ペルシア文学」「ペルシア語講読」特殊研究「アラビア語」などの比重が増していった。

一九六四(昭和三十九)年四月に蒲生が定年退官した。一九二五年に外国語学校講師に就任以来三九年間を、蒲生はわが国におけるヒンドスタニー(ウルドゥー)語とペルシア語の教育に先駆者としての役割を果たすとともに、イスラームとイランの学問的紹介、ペルシア古典文学の研究と翻訳に力を尽くした。一九七二(昭和四十七)年四月に勲三等旭日中綬章を受賞、一九七七(昭和五十二)年八月十二日に急性肺炎のため死去した。弟子たちにより「蒲生禮一先生記念論集」(蒲生禮一先生記念刊行会)が一九八七(昭和六十二)年七月に刊行された。

一九六六(昭和四十一)年四月一日、大学院外国語学研究所修士課程が設置された。アジア第二言語専攻のインド語学は一九六九(昭和四十四)年三月の二名をはじめとして一四名の、一九八二(昭和五十七)年よりはウルドゥー語学七名、ヒンディー語学三名総計二四名の修了者を出した。このうちウルドゥー語学科の卒業生は一五名である。インド語学の一四名中の七名はウルドゥー語学科出身者で、四名がウルドゥー文学関係、三名がペルシア文学関係の論文を執筆した。ウルドゥー語学七名の論文の内訳はウルドゥー古典文学一、ウルドゥー現代文学二、ウルドゥー語学二、ペルシア古典文学二である。一九六八(昭和四十三)年十月に始まった大学紛争でキャンパスが封鎖されたた

め、六九年度の入学者は三鷹の黒柳宅で一学期の授業を受けた。同年の五月に六六年三月ウルドゥー語学科卒業生で六九年三月に修士課程を修了したペルシヤ文学専攻の山田稔が助手に採用された。一九七七（昭和五十二年）四月一日に大学院地域研究研究科が設置された。ウルドゥー語学科出身者からは八二年に一名、九〇年に二名の修了者を出している。

一九八〇（昭和五十五年）年四月一日にペルシヤ語学科が設置された。黒柳恒男と一九六八（昭和四十三年）年四月よりウルドゥー語学科の非常勤講師として「ペルシヤ語会話と作文」「ペルシヤ文学」「ペルシヤ文学史」などを担当していた岡田恵美子が新学科に移籍し、山田稔は退官した。

第二期（一九八〇—一九九八）

一九八〇（昭和五十五年）年四月一日のペルシヤ語学科新設にともない、専任教員が鈴木とガンディーの二名のみとなったウルドゥー語学科は、一九六八（昭和四十三年）年卒業の初野雅彦と七八年大学院アジア第二言語専攻修了でペルシヤ文学専攻の青木（橋本）愛子を非常勤講師に迎えた。初野は日本放送協会国際局に勤務しており、同じく国際局勤務の非常勤講師には、七一年四月から務める佐藤浩史（昭和四十年卒）がいた。両名とも専門とする時事ウルドゥー語の講義を担当した。青木はペルシヤ語初級と中級の授業を受け持った。ウルドゥー語と密接な関係を持つ重要語であるペルシヤ語の授業は、鈴木が定年退官する一九九五（平成七）年三月まで青木によって続けられた。一九七七（昭和五十二年）年からはウルドゥー語学文学特殊研究としてヒンディー語の講義が田中敏雄によって始められた。ウルドゥー語学科の学生は専攻語に加えてペルシヤ語、ヒンディー語をも学習することによってそれぞれの関心領域を拡大することができた。

一九八一（昭和五十六）年四月一日、大学院アジア第二言語専攻を修了した萩田博が助手として採用された。同時に、七四年三月大学院アジア第二言語専攻を修了した麻田豊が講師として奉職した。麻田は七四年八月より七六年四月までカラチ大学に留学し、同年五月より七八年八月三十一日までカラチの日本総領事館に勤務後、十月一日より大阪外国語大学の助手に採用され、東京外国語大学に移籍時には講師として勤めていた。現在、南・西アジア課程・ウルドゥー語、総合文化講座に属している助教麻田の専門分野は「東京外国語大学教育研究者総覧一九九六」によれば、ウルドゥー語学、ウルドゥー文学、インド・イスラーム文化論、であり、同じく南・西アジア課程・ウルドゥー語、言語情報講座所属の講師萩田博の専門分野は、ウルドゥー語学・文学、パンジャービー語学・文学、である。萩田は一九八四（昭和五十九）年十二月より一年間パーキスタンのパンジャーブ大学オリエンタル・カレッジ文学部に留学している。

一九八五（昭和六十）年三月三十一日客員教授ガーンディーが定年退職した。在職中、教材のテープ吹込み、インドからのウルドゥー語教科書の取り寄せなど、ガーンディーが担った地味な役割は大きかった。ガーンディーの授業は会話・作文の他に、文学概論「現代ウルドゥー文学」「ウルドゥー語エッセイ」などの講義が中心であった。在職中、休講や始業時間に遅れることはほとんどなかった。この年四月一日より七九年三月大学院アジア第二言語専攻修了の都筑正夫とアジア経済研究所動向分析部の深町宏樹が非常勤講師になった。一九七六（昭和五十一）年三月より二年四か月におよぶカラチ大学留学を経た都筑は現代ウルドゥー文学の専攻者として一九九八（平成十）年三月三十一日まで文学講義を受け持った。一九六九（昭和四十四）年六月英米語学科卒業の深町は、パーキスタン政治の専門研究者として同じくアジア経済研究所よりの非常勤講師として七六年四月より八一年三月まで勤務した平島成望、八二年四月より九五年三月まで在職した山中一郎とともに、ウルドゥー語学科事情講座の重要な担当者となった。イ

インド・パーキスタン史の講義では八七年四月より立教大学文学部教授小西正捷が、九二年四月よりは青山学院大学文学部教授小名康之がそれぞれ延べ数年間にわたって非常勤講師を委嘱されている。そのほか歴史関係では一九五五（昭和三十）年三月第七部第一類卒業でアジア・アフリカ言語文化研究所助教中村平次が多年にわたって講師を務めた。

ガンディー以後の外国人教師は関連の深いカラチ大学文学部関係者より選ぶことになった。その結果、一九八五（昭和六十）年四月一日にスイラージ・ウツダウラ・カレツジのウルドゥー学部主任教授のムハンマド・ライース・アラヴィーが着任した。ライースの専門はウルドゥー韻文文学であった。四年間の在職中、ライースは非常に熱心に学生を指導した。学生の会話力強化には特に力が入られた。休講や始業の遅れはまったくなかった。学内行事にも積極的に参加した。『実用ウルドゥー語会話』（大学書林、一九八七年、共著）を著したほか、西行の山家集や万葉集のウルドゥー語訳に取り組むなど日本文学の紹介にも努めた。ライース在職中の一九八八（昭和六十三）年四月一日に旧来の名称であるウルドゥーがウルドゥーに改正された。

麻田豊、萩田博の採用で強化されたウルドゥー語学科研究室は新たに教材の開発に着手した。すなわち、「文部省教育方法等改善プロジェクト」に基づいて東京外国語大学語学教育協議会が進めている一九八一（昭和五十六）年度事業に初めて参加し、前期課程用の『ウルドゥー語読本（一）』と後期課程用の『ウルドゥー語読本（二）』を編纂した。八三年度プロジェクトよりは後期課程用に現代ウルドゥー文学選の編集を始め、隔年で「（一）動乱文学」「（二）女流文学」「（三）風刺諷刺文学」「（四）戯曲文学」を刊行することができた。八八年度よりは麻田による映画スクリーンとドラマ・スクリーンプロットの編纂が続けられている。

一九八九（平成一）年三月三十一日にライースの任期満了にともない、同年四月一日付でカラチ大学文学部助教教授

ザファル・イクバルが着任した。ザファルの主な研究領域は古典文学史である。四年間の在職中に「東京外国語大学論集四一」から同四四まで毎年にわたり論文を発表した。ザファルの後任には九三年四月一日付でカラチ大学文学部助教授ムーヌッディーン・アキールが選任された。アキールの研究領域はパーキスタン独立運動史を中心に据えながら、ウルドゥー文学の古典から現代にいたる多岐にわたっている。真摯な学究としてウルドゥー語研究と教育に熱心に携わり、学生への指導も行き届いている。「東京外国語大学論集四九」「同五三」などに論文を発表するとともに外国語大学在任中すでに八冊のウルドゥー文学関係研究書を出版した。九九年度までの契約更新が行われている。

3 インド・パーキスタン学科（ヒンディー）の時代

『運営委員会記録簿』（自昭三十三年一月―至昭三十四年十二月、教務課）によると、一九五八（昭和三十三年）一月二十二日、「インド語十名増募となり、助手定員を教授定員に振替えることが決定（一名）されたことを部長より報告」とあり、二月五日、「インド語はヒンディーとウルドゥーに分けることにし、第二年で蒲生、黒柳氏がウルドゥーを、ヒンディーは土井氏と増谷氏の講義流用、それに外人講師を四一六として増してもらう。外国人講師の授業はヒンディーとウルドゥーに分けたい。外人は四は必須とし、あとやむをえないときはサンスクリットを二とすることも考えている」五月二十一日、運営委員、名誉教授選考委員会合同会議で、「インド語専攻学生増員に伴う申請内容と関連して別紙案通り改正了承」とあり、学則第三条十四項の「…インド…」は「…パーキスタン、インド…」に、第十五項の「…インド語…」は「…ウルドゥー語又はヒンディー語…」となった。

『昭和三十三年度 概算要求附属参考書』（東京外国語大学、一九五八年）によれば、インド語専攻学生増募として、

「所謂インドはインドおよびパキスタンの両国に分れ、各々その言語、宗教、習慣等両国に共通の点なく、殊に言語は、インドにおいてヒンディー語、パキスタンにおいてはウルドゥ語を用いている。従ってインド語専攻学生はヒンディー、ウルドゥの何れか一ヶ国を専攻する必要に迫られつつあり、且つ近時国際情勢の好転に伴い印度方面へ発展の度を加えつつある現況に鑑み、昭和三十三年（ママ）より、現在定員一学年二〇名を三〇名に増加して、これをヒンディー語専攻学生十五名、ウルドゥ語専攻学生十五名に分け、二クラス編成としたく、因って、教官定員の増員及び振替を次のとおり要求する」とある。

一九五八（昭和三十三年）年度は、『科目履修の手引』があるだけで、『講義題目一覧』はない。『昭和三十四年度 講義題目一覧』（一九五九年）によれば、土井は、インド独立運動史としてナレインドラデーヴの『ナシヨナリズムと社会主義』、インド文化史としてティンカルの『文化に関する四章』、ザヴェーリーが、『現代隨筆選集』、『短編小説集』を担当した。前期専攻語学の授業は、土井と三人のインド人講師の他に、インド大使館員の子女がポランティアとして参加した。ポランティアには先例があり、前述に述べるように女流作家として知られている外交官夫人カムラ・ラトナムが、一九五一（昭和二十六年）年、ヒンディー語の授業をした。ポランティアであるため庶務課の人事記録にはない。

一九六二（昭和三十七）年から前期専攻語学の授業を、土井のほかに、田中、佐分利（山田）和子、さらに、坂田貞二、内藤雅雄が担当した。

一九六〇（昭和三十五年）年以降、ガンディーによる現代インド論、ザヴェーリーによるラームゴーパールの『インド政治史』、ラーフル・サンクリティヤーヤンの『ボルガよりガンジス』が加わり、土井は、スニートイクマール・チャッテルジーの『インド・アーリヤ語とヒンディー』、ハザリープラサード・ドゥヴイヴェーデーの『ヒ

ンディー文学序説」を加え、ディンカルを継続し、ヒンディー語学文学、文化史をカバーしようとした。

一九六九（昭和四十四）年度より共通講義として、中村平次（アジア・アフリカ言語文化研）が政治論、山口博一（アジア経済研）が社会経済論を担当し、以降、事情概説、特殊研究が充実されるようになった。非常勤講師一覧に氏名、委嘱年度が記載されているが、一九五九（昭和三十四）年度以降、分野別、本務先を示すと以下の通りになる。歴史では、荒松雄（東京大）、山崎元一（国学院大）、内藤雅雄（アジア・アフリカ言語文化研）、辛島昇（アジア・アフリカ言語文化研、東京大）、長崎暢子（東京大）、小谷汪之（千葉大、都立大）、山崎利男（東京大）、小名康之（青山学院大）、中里成章（東京大）、粟尾利江（東京大）、吉村（脇村）玲子、政治の分野では、落合淳隆（拓殖大）、佐藤宏（アジア経済研）、鳥羽嶺次郎（大東文化大）、深町宏樹、近藤則夫、望月真弓（いずれもアジア経済研）、竹中（藤原）千春（明治学院大）、経済では、深沢宏（二橋大）、柳沢悠（東京大）、平島成望（アジア経済研）、伊藤正二（アジア経済研、横浜市立大）、山一郎（アジア経済研）、古賀正則（二橋大）、絵所秀紀（法政大）、黒崎卓、井上恭子（いずれもアジア経済研）、宗教、民族文化、文化人類学では、中村廣次郎（東京大）、小西正捷（立教大）、永ノ尾信悟（東京大）、井上（荒井）貴子（大東文化大）、名和克郎（東京大）が担当した。

前期専攻語学の授業は、土井、田中のほかに、一九七六年度より客員教授が加わり、専任が担当するようになった。土井退官後の七九年度は、田中、客員教授と稲原明（NHK）が担当し、八〇年度から町田和彦が、八七年度から藤井毅が加わり、専任による授業が可能となった。

一九六七（昭和四十二）年以降、文学担当の田中は、小説、詩、エッセイ、伝記、風刺などの分野を選び、文学史、中世文学研究として、『ラームチャリトマーナス』を講読している。

一九八四年以降、語学担当の町田は、語彙・音韻論、複合動詞、インド語派比較研究、文字論から、パーソナル・

コンピュータを利用したヒンディー語研究の可能性、機械処理へと進んだ。

一九九一（平成三）年度以降、事情担当の藤井は、ヒンディー語文献史、十九世紀の北インド社会、植民地支配下の民族誌記述、カースト「族譜」文献の研究などを担当し、一九八八年以降、前期事情講義を担当している。新制大学発足以来、田中於菟彌、落合、山崎（利）、柳沢が担当していた授業科目である。

新制大学発足以来、研究語学サンスクリット語は、田中（於）が担当し、語学文学特殊研究として、高崎直道（東京大）、奈良康明（駒沢大）を経て、長柄行光（早稲田大）に引き継がれている。

南アジア研究に、ヒンディー、ウルドゥー語のほかにもインド近代語研究の重要性から、一九六八（昭和四十三）年度、佐分利（山田）によって始められたベンガル語は、佐藤、半田（丹羽）京子、奈良毅（アジア・アフリカ言語文化研）を経て、白田雅之（東海大）に引き継がれている。七四年度、内藤によって始められたマラーティー語は隔年開講となっている。八五年度、岡口典雄によって始められたパンジャービー語は九一年度まで続き、現在は萩田が担当している。一九九五（平成七）年、粟屋によるケララの言語、文化、社会は、九八年度、マラーヤラム語初級に引き継がれている。高崎孝信（東京大）のドラヴィダ文学概論でタミル語の、井上恭子の現代南アジアの諸相でカンナダ語の初歩が学べるようになっていた。

一九七九（昭和五十四）年度から、ヒンディー語専攻の学生がウルドゥー語を、ウルドゥー語専攻の学生がヒンディー語を学べるように、鈴木、田中によって半期間開講された授業は、通年から、初級、中級となり、専任教官のほかに、橋本泰元（東洋大）、石川（白井）恵子、萬宮健策に引き継がれている。

一九九六（平成八）年から、バースカラ・ラーオ・ペリ（アジア・アフリカ言語文化研）が、南アジア言語入門、インド・アーンリヤ語史を担当し、学生たちの関心を揚げようとしている。

共通講義でないヒンディー語学文学では、一九六九（昭和四十四）年より、坂田が中世ヒンディー文学を中心に言語と社会、口承文学を担当し、七〇年から、ラクシュミーダル・マールヴィヤー（大阪外大）が最新刊のヒンディー文学作品を教材に学生たちの指導にあたり、七九年度から、石田英明（大東文化大）が現代文学講義を担当している。また、八一年から八七年にかけて、古賀勝郎（大阪外大）は集中講義で、諺、大衆文学、民俗語彙について講義した。七九年から九〇年度にかけて、稲原は時事ヒンディー語を担当した。

外国人教師一覧に氏名、在職期間が記載されているが、ここでは本務先、専攻分野に触れる。外国人教師は、前期専攻語学四、後期三、を担当することになっている。シャームスダル・ジョーシー（作家、筆名シャーム・サンニャースー）は小説史、プレーム・チャンドの作品を講義し、インドウ・ジャイン（デリー大・女子カレッジ）は自選詩集、短編小説集を講読した。ラージクマリー・ブツディラージャー（デリー大・女子カレッジ）は文体論を、パドリーナート・カプール（辞典編纂者）は動詞とイデオムを中心に講義し、インドウジャー・アワステイー（デリー大・女子カレッジ）はラーマ劇の言語について講義し、ニシャー・ククレージャー（NHK）は実用ヒンディー語を指導した。マールヴィーヤは、一九七〇（四十五）年以来、非常勤講師としてヒンディー語教育に尽力したが、一九九〇（平成二）年度から一年間、外国人教師を務めた。サッティヤプラカーシュ・ミシユラ（アラハーバード大）は文学評論が専門であるが、一身上の理由で帰国し、サラスワテイー・バッラー（ヒマーチャル大）は文学史を、マンジュラー・ダース（デリー大・カレッジ）は現代ヒンディー戯曲史を、ミラー・シユリーワースタヴ（アラハーバード大）は作詩法時代の詩人とその作品を講義した。クリシュンダット・シャルマー（デリー大）は文学史のほかに、表現演習用の教材を書き下ろし、修正を加えている。

一九七〇（昭和四十五）年から、大学交流協定を結ぶよう、デリー大学とアラハーバード大学と交渉を開始したが、

アラハーバード大学との間に、原卓也（一九九〇年十二月二十六日）、トウリヴィクラムパティ（一九九一年一月十日）が署名し締結した。日付が違うのは、アラハーバード大のラームスワループ・チャトウルヴェーデー教授と一年間書簡を交わし、案文に合意したからである。この協定書を参考に、デリー大のニティヤーナンド・ティワリー教授と後任のS・N・アイヤル助教授と書簡を交わし、中嶋嶺雄（一九九七年十一月二十五日）、ウラジェンドララージ・メヘター（一九九七年十二月十日）が署名した。

この協定書により、アラハーバード大へ一名、デリー大へ一名の学生が留学した。

一九一（明治四十四）年ヒンドスタニー語学科が設置されて以来、外国語学校、外事専門学校、新制大学時代を通じて一九六〇（昭和三十五）年三月三十一日までには、ヒンドスタニー語を専攻して卒業した学生の数は三一八名に達した。六一年四月一日にインド学科はインド・パーキスタン科と改称され、ウルドゥー語とヒンディー語の専攻学生が分離された。九五（平成七）年四月一日にインド・パーキスタン語学科は中東語学科と合わせて南・西アジア課程に改組された。九八年三月二十六日、インド・パーキスタン語学科ウルドゥー語専攻一五名、ヒンディー語専攻一二名が卒業式を迎えた。

六一（昭和三十六）年三月十六日のウルドゥー語専攻卒業生八名を含め、九八年三月二十六日までのウルドゥー語学科卒業生の数は五一五（内、女子一九八）名である。同じ時期のヒンディー語学科卒業生は五〇二（内、女子一九一）名である。これに一九五三（昭和二十八）年三月より六十年三月までの卒業生九〇名を加え新制大学になって以来の卒業生は一、一〇七名になる。一九一四（大正三）年三月に第一回本科卒業生四名を世に送りだしてから八四年間でインド・パーキスタン語学科卒業生の総数は延べ一、三三五名（外事専門学校と新制大学の重複者七名を含む）

二 新制大学におけるインド学科の発展と拡大

む)に達している。

一九九七(平成九)年四月二十二日、東京外国語大学講堂において創立百周年記念式典が挙行された。

主要参考資料

【日本外交文書】

【東京外国語学校一覽】

【外国人教師契約書】

【教員履歴書】

【講義題目】

【生徒名簿】

【学生便覧】

【東京外国語大学沿革略史】一九九七年

【運営委員会記録簿・自昭和三十三年一月―至昭和三十四年十二月】

【東京外国語大学同窓会名簿】一九九四年

【東京外語同窓会誌】

【東京外語会報】

Muhammad Badr al-Islam Fazli : Haqiqat-e Jāpān, Anjuman-e Taraqqi-e Urdu, Aurangābād, 1934